



当院における漢方診療の実際

緩和医療において 期待される漢方治療

日本赤十字社 姫路赤十字病院 緩和ケア内科 副部長 福永 智栄 先生



1998年 三重大学医学部 卒業
1999年 大阪府立母子保健医療センター 麻酔科レジデント
2004年 兵庫医科大学 皮膚科 臨床助手
2006年 兵庫医科大学 疼痛制御科学・ペインクリニック部 助教
2014年 日本赤十字社 姫路赤十字病院 緩和ケア内科 副部長

かつて、末期がん患者が治療対象と見なされていた緩和医療は、2006年に制定された「がん対策基本法」を契機にがん治療において大きく注目されるようになり、2015年に策定された「がん対策加速化プラン」ではさらにその充実が謳われている。一方で、全人的なアプローチを基本とする漢方が、緩和医療領域においても近年、注目されている。姫路赤十字病院緩和ケア内科の福永智栄先生は、日常診療に漢方治療を積極的に取り入れることで、より高い治療効果をあげておられる。“患者さんに常に寄り添いながら、患者さんの苦痛を和らげる”医師であり続けたいとおっしゃる福永先生に、緩和医療領域において期待される漢方治療の実際をお伺いした。

長年にわたり地域医療に貢献している姫路赤十字病院

当院は、1874年に創立された姫路城廓内の病院(1882年に飾磨県立病院)が1908年に日本赤十字社兵庫県支部の管理下となり、現在の姫路赤十字病院として創立されました。過去には多数の軍患者を収療した時期もありましたが、1957年に総合病院となり、2008年には創立100周年を迎えました。

当院はこのように非常に歴史のある病院ですが、現在は兵庫県中播磨地区の地域医療支援病院として、さらに地域がん診療連携拠点病院、地域周産期母子医療センター、災害拠点病院として、地域の皆様に質の高い医療をご提供しています。

当院の緩和ケア内科の概要

当科では、当院で治療中のがん患者さんの疼痛緩和・症状コントロールを診療の主体としています。さらに、私がペインクリニック医であることから、オピオイドなどの薬物療法だけでなく神経ブロック療法も施行しているという特徴があり、地域の紹介患者さんも診療しています。また、地域がん診療拠点病院として病診連携を図ることで質の高い緩和医療をご提供できるよう、がん疼痛治療における

コーディネーターの役割も担っています。

当院は急性期病院のため緩和ケア病棟は設置していませんが、緊急時用に緩和ケア病床として5床が設置されており、緩和ケアチームが治療・ケアを行っています。緩和ケアチームは、緩和ケア医と看護師、薬剤師、ソーシャルワーカー、臨床心理士などがコアのメンバーですが、内科や整形外科、放射線科の先生にも協力メンバーとして参画していただいています。

また、各病棟に配置されているリンクナースが疼痛などでお困りの患者さんを拾い上げ、緩和ケアチームに依頼するというシステムもあります。

緩和ケア内科における漢方治療の実際

● 当科における漢方治療の現況

当科では積極的に漢方治療を行っています。実際に、2016年1月～5月に当科で診療した323名中34名の患者さんに漢方薬を処方しています(図1)。

漢方薬だけで患者さんが訴えるすべての症状を取り除くことは決して容易ではありませんが、患者さんの苦痛を少しでも緩和できるため、治療において漢方は大きな武器になっています。

● 補剤の使い分けの考え方

全身倦怠感や食欲低下などの症状は、コントロールが難しい場合が多いのですが、このような患者さんには補剤が奏効することを多く経験します。

補剤の使い分けについては星野恵津夫先生(がん研有明病院)のお考えに基づき、がんの治療中に疲労感や倦怠感、食欲低下などの症状を訴える患者さんには、第一段階として補中益気湯を選択します。病状の進展に伴い気血両虚を呈するようになると第二段階として十全大補湯、さらに体力が消耗し呼吸器症状を伴う場合は第三段階として人參養榮湯を選択しています。この他に、食欲がなく常に胃が重いという患者さんには六君子湯も良い適応です。さらに全身が衰弱した場合の選択肢に茯苓四逆湯がありますが、そのような状態になるとむしろ他の症状の緩和を目的に、たとえば咳嗽に麦門冬湯、冷えに真武湯など、比較的患者さんが服用しやすい漢方薬を処方しています。

私は補剤の中でも特に補中益気湯を好んで処方しているのですが、そのきっかけとなった症例をご紹介します(図2)。脾頭部がん・リンパ節浸潤と診断され、疼痛緩和を目的に紹介受診された60歳代の男性です。オピオイドの導入と腹腔神経叢ブロック療法を施行中に倦怠感、食欲の低下がみられたため補中益気湯を処方しました。そうすると症状は軽減し、さらに2回目の腹腔神経叢ブロック療法を施

図1 当科での漢方薬の使用状況 2016年1月～5月

漢方薬の処方患者: 34名(323名中)

漢方薬処方内訳(重複あり)

倦怠感・食欲低下: 9名、リンパ浮腫: 6名、腹痛: 5名、末梢神経障害: 4名、口内炎: 4名、咳嗽: 3名、冷え: 2名、こむら返り: 2名、便秘: 2名、抑うつ: 2名、手足症候群: 1名、寝汗: 1名

頻用処方

五苓散、補中益気湯、十全大補湯、八味丸、当帰四逆加呉茱萸生薑湯、黄連解毒湯、半夏瀉心湯、安中散、桂枝加芍薬湯、芍薬甘草湯、麦門冬湯、温清飲

その他、緩和医療で有用な漢方薬

六君子湯、人參養榮湯、加味帰脾湯、真武湯、牛車腎気丸、大建中湯、半夏厚朴湯、茯苓飲、抑肝散、抑肝散加陳皮半夏、麻子仁丸、桃核承気湯、九味檳榔湯

図2 補中益気湯が奏効した症例

【症 例】60歳代 男性

【診 断】脾頭部がん、リンパ節浸潤

【主 訴】腹部・背部痛

【既往歴】高血圧、腎結石、C型肝炎

【現病歴】上記にて当院外科を受診。化学療法・放射線療法を施行予定も痛みが強く、症状緩和の目的で当科を紹介受診。持続痛あり。ジクロフェナクナトリウム坐薬を使用。

【治療経過】オピオイド導入、腹腔神経叢ブロック施行後、痛みの軽減がみられ、治療継続が可能となった。治療中に倦怠感・食欲低下がみられたため補中益気湯(7.5g)を処方。腫瘍の縮小効果と症状の軽減効果が認められた。

一旦、緩解にもっていくことができたことと、再発後も症状コントロールを図ることができ、患者のQOL向上につながった。



行できました。西洋医学的治療の効果に加え、補中益気湯が患者さんの状態に好影響を与えたのではないかと思います。

● 漢方処方の際の工夫

がん患者さんは主科で非常に多くの薬剤が処方されているので、さらに漢方薬を服用することに少なからず抵抗感があります。そこで、漢方薬を処方する際には必ず服用の可否をお聞きしています。しかし、実際に漢方薬を服用していただくと多くの患者さんはその良さを実感してくださいますし、治療上で良い印象があります。たとえば、オピオイドによる吐き気が原因でオピオイド抵抗性の患者さんに、NSAIDs(セレコキシブ)と安中散を併用したところ“鎮痛の質”が良くなることや、芍薬甘草湯の併用で鎮痛効果が増強されるなど、もう少し痛みを取りたいという時の“もうひと押し”に漢方薬を併用する意義を実感しています。

もちろん、漢方薬を服用していただくための工夫も必要です。たとえば、粉薬は飲みにくいとおっしゃる患者さんには錠剤や、八味丸のように丸剤を処方します。また、がん患者さんの多くは1日3回の服用が難しいため、西洋薬も含めて1日2回の処方にしていますが、その点で1日2回服用製剤は非常に使いやすいという印象があります。

“患者さんに常に寄り添いながら、患者さんの苦痛を和らげる”医師であり続けたい

緩和医療は、患者さんの全人的な苦痛を和らげることによりQOLの向上を目指す医療ですが、この考え方は緩和医療に限らず、すべての医療に共通していると思いますし、漢方にも通じるところがあります。

漢方には西洋医学にない良さがありますので、漢方と西洋医学のそれぞれの良さを活かしながら、さらに二つの医学を融合できるような医療ができるようになりたいと思っています。そして、漢方の良さを患者さんだけでなく、広く医療に携わる皆様にもお伝えしていきたいと思っています。

そして漢方を活かしながら、“患者さんに常に寄り添いながら、患者さんの苦痛を和らげることができる”医師であり続けたいと思っています。